

日本における鋼製カンチレバー構造の椅子に関する 研究(2)普及過程と意匠の展開を通して

石村, 眞一
九州大学大学院芸術工学研究院人間生活システム部門

林原, 泰子
西日本工業大学 : 非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/2794881>

出版情報 : 芸術工学研究. 8, pp.11-28, 2007-12-15. 九州大学大学院芸術工学研究院
バージョン :
権利関係 :



日本における鋼管製カンチレバー構造の椅子に関する研究－（２） －普及過程と意匠の展開を通して－

Study on Steel Tubular Cantilever Chair in Japan(2)

- Their diffusion and design development -

石村眞一
ISHIMURA Shinnichi

林原泰子
HAYASHIBARA Yasuko

Abstract

As a result of our review of three kinds of journals issued from 1931 to 1940 on steel tubular cantilever chairs for their diffusion and design development in Japan, the followings are noted:

Steel tubular cantilever chairs started to be used from 1931 in Japan, and widely used between 1933 and 1937. In other words, the chairs were produced for 10 years in Japan before World War II.

From 1931 the chairs were used mainly in the public space, and were in quantity production. While some were designed for personal residence, so cantilever chairs were produced both on order and in quantity.

The area the chairs used was limited to the Kanto area. Many architects took parts in its designing, and the diffusion of the design was made among their groups. Several variations from a design were applied depending on situations.

After World War II, cantilever chairs lost its popularity and were quite forgotten in the world until 1950s.

1. はじめに

本論は、日本における鋼管製カンチレバー構造の椅子に関する研究の第２報で、普及過程と意匠の展開について考察することを目的とする。

前報では、カンチレバー式鋼管椅子の日本における開発時期、開発者、製造メーカーについて文献史料より追究した。その結果、1928（昭和３）年には日本金属加工株式会社より既に実用化され、1931（昭和６）年あたりから東京で使われ始めたことが明らかになった。

カンチレバー式鋼管椅子が、戦前のモダニズム建築に広く使用されたことはよく知られている。ところが、そうしたカンチレバー式鋼管椅子が、どの程度オリジナルな意匠であったかについては、管見の限りまとまった研究は見当たらない。椅子はインテリアの一部であり、単独で取り上げることは、建築全体の設計理念との関連がわかりづらいという指摘もあろう。しかしながら、カンチレバー式鋼管椅子は、プロイヤー、ミースが当初から特許を申請しているように、量産型の工業製品という面も持ち合わせており、独立した家具としてその発達過程、意匠を考察することも必要と考える。

2. 研究の方法と対象

本論は文献史料と画像資料を通して、カンチレバー式鋼管椅子の普及過程と意匠を読み取り、建築家の椅子に関する設計観を抽出する。

使用する主たる文献史料及び画像資料は、1931（昭和６）年から1940（昭和15）年に刊行された雑誌『国際建築』『アサヒグラフ』『建築写真類聚』とする。

3. 文献史料および画像資料調査結果

3.1. 掲載紙と掲載時期、使用場所、数量

表1-1 雑誌に掲載されたカンチレバー式鋼管椅子-1

1931（昭和6）年3月	○〔国際建築-1〕 国際建築第7巻第3号圖版17-18 ルックハルト氏アンカー氏の鋼パイプ家具
〃 7月	○〔国際建築-2〕 国際建築第7巻第7号圖版32-38 獨逸建築博覧會・ベルリン（山脇巖と藏田周忠が撮影） ワ・カンディンスキー設計・音楽堂 ミース・ヴァン・デア・ローエ設計 ルックハルト氏兄弟設計・住宅居間・家具
〃 9月	◎〔国際建築-3〕 国際建築第7巻第9号圖版16 出雲橋トムサム ゴルフコース 二階休憩室・東京銀座・山田守設計
〃 11月	◎〔国際建築-4〕 国際建築第7巻第11号圖版7 百貨店 白木屋 日本橋區通一丁目 七階パーラー 石本喜久治設計
〃 12月	○〔国際建築-5〕 国際建築第7巻第12号圖版12-13 ロッテルダム住宅・和蘭：プリンクマン ファンデル フォルグト設計 ◎〔建築寫真類聚-1〕 建築寫真類聚第8期第2輯24頁 百貨店・白木屋 卷二 歩廊の休憩所・石本喜久治設計
1932（昭和7）年3月	◎〔国際建築-6〕 国際建築第8巻第3号圖版64-66 住居と倉庫を持つ書店 目黒書店・神田區駿河臺・伊藤氏設計 ◎〔国際建築-7〕 国際建築第8巻第3号圖版68-72 土浦邸（乾式構造）居間・市外下大崎町・土浦龜城設計 ◎〔国際建築-8〕 国際建築第8巻第3号圖版77 平林邸（乾式構造）食堂・牛込區納戸町・土浦龜城設計 ◎〔国際建築-9〕 国際建築第8巻第3号圖版80 市浦氏邸（乾式構造）居間・市外澁谷町・市浦健設計 ◎〔国際建築-10〕 国際建築第8巻第3号159-174頁 「Y S Y 鋼管家具」
〃 4月	◎〔アサヒグラフ-1〕 アサヒグラフ第18巻第17号4頁 土浦邸 スーパーモダンの家・土浦龜城設計 ◎〔アサヒグラフ-2〕 アサヒグラフ第18巻第17号5頁 上田道次郎内部 石本喜久治設計
〃 5月	○〔アサヒグラフ-3〕 アサヒグラフ第18巻第22号71頁 新興ドイツ建築工藝 上野松坂屋にて
〃 6月	○〔国際建築-11〕 国際建築第8巻第6号135頁 獨逸保倫聯合事務所建築・エミール・ファーレンカンプ教授設計
〃 7月	◎〔国際建築-12〕 国際建築第8巻第7号308-315頁 「日本人の椅子のスケール」 豊口克平
〃 11月	◎〔国際建築-13〕 国際建築第8巻第11号圖版240-243 ダンスホール フロリダ・赤坂區溜池・佐藤武夫設計 ◎〔国際建築-14〕 国際建築第8巻第11号圖版246-247 赤星邸・芝區高輪北町・レーモンド建築事務所設計
1933（昭和8）年1月	◎〔国際建築-15〕 国際建築第9巻第1号圖版13 東京ゴルフ倶楽部ハウス 婦人室・埼玉県朝霞町・レーモンド建築事務所設計
〃 4月	○〔国際建築-16〕 国際建築第9巻第4号圖版83 巴里の高層住宅 居間・佛：ギンズブルク及ルベートキン設計 ○〔国際建築-17〕 国際建築第9巻第4号圖版86 デュッセルドルフの住宅 アテリエ・獨：ハンス・ユンクハンス設計
〃 5月	◎〔国際建築-18〕 国際建築第9巻第5号圖版107 加地邸・芝區白金三光町・遠藤新建築創作所設計 ◎〔国際建築-19〕 国際建築第9巻第5号圖版110-111 山越邸・東京府下三鷹村・山越邦彦設計 ○〔国際建築-20〕 国際建築第9巻第5号圖版118 デーボンの住宅・英：ハウエ氏 レスケージ氏設計
〃 7月	◎〔国際建築-21〕 国際建築第9巻第7号圖版168-169

表1-2 雑誌に掲載されたカンチレバー式鋼管椅子-2

1934 (昭和9) 年	8 月	鳩山博士邸 A邸 B邸・小石川区音羽町・レーモンド建築事務所設計
		○ [国際建築-22] 国際建築第9巻第8号304頁 WACHSENDE HAUS [注1]・獨: オットゥ・バートニング教授設計
	9 月	◎ [国際建築-23] 国際建築第9巻第9号圖版209 喫茶店「銀座コンパル」 ギャラリーより中庭・東京銀座・石本建築事務所設計
		○ [国際建築-24] 国際建築第9巻第10号圖版230 ミラノ博覧會のイタリー新住宅展 画家の住宅
	11 月	◎ [国際建築-25] 国際建築第9巻第11号圖版249 細谷邸 嶋喃荘 サロン・本郷區元田町・佐藤武夫設計
		◎ [国際建築-26] 国際建築第9巻第11号圖版254-255 佐々木邸 豫備室 玄關應接室・大森區田園調布・谷口吉郎設計
	1934 (昭和9) 年 1 月	◎ [アサヒグラフ-4] アサヒグラフ第22巻第3号8頁 竹内邸 ラヂエータ暖房・土浦龜城設計
		◎ [アサヒグラフ-5] アサヒグラフ第22巻第3号9頁 山越邸 暖房のない部屋・山越邦彦設計
	2 月	◎ [アサヒグラフ-6] アサヒグラフ第22巻第8号7頁 平林邸 居間と食堂・土浦龜城設計
		◎ [建築寫眞類聚-2] 建築寫眞類聚第9期第1輯23-24頁 建築家の家 卷一・土浦龜城自邸 居間・東京五反田・土浦龜城設計
	4 月	◎ [建築寫眞類聚-3] 建築寫眞類聚第9期第1輯45頁 建築家の家 卷一・今井猛雄氏邸 應接室兼アトリエ・東京自由ヶ丘・今井猛雄設計
		◎ [国際建築-27] 国際建築第10巻第4号圖版105-106 島田邸 居間 寢室 書齋・目黒區上大崎・齋藤寅郎設計
	5 月	○ [国際建築-28] 国際建築第10巻第4号圖版115-117 V.D.L. 實驗家屋・加州ロスアンゼルス・リチャード ノイトラ設計
		○ [国際建築-29] 国際建築第10巻第5号圖版138-139 コルセットのショールーム・ロンドン・サージ・チェルメッフ設計
	6 月	○ [国際建築-30] 国際建築第10巻第5号圖版145 ゼノア新埠頭・イタリー・ルイヒ・ウェディ設計
		◎ [アサヒグラフ-7] アサヒグラフ第22巻第22号10-11頁 富永邸 書齋・土浦龜城設計
	9 月	◎ [国際建築-31] 国際建築第10巻第6号圖版153 日本齒科醫學専門學校附属病院・麹町區富士見町・山口蚊象設計
		◎ [国際建築-32] 国際建築第10巻第6号圖版164-165 富永邸 居間と食堂 書齋・目黒區下目黒・土浦龜城設計
	10 月	○ [国際建築-33] 国際建築第10巻第6号圖版230-232 フィンランドの結核サナトリウム・建築家 alver aalt
		○ [国際建築-34] 国際建築第10巻第9号圖版282 ウィースバーデンの住宅・ドイツ・marcel breuer設計
	12 月	◎ [国際建築-35] 国際建築第10巻第9号圖版272 W邸 應接室・澁谷區代々木・株式会社島藤設計施工
		◎ [建築寫眞類聚-4] 建築寫眞類聚第9期第5輯13-16頁 喫茶店の新構成 卷一・喫茶店 コンパル・東京銀座・石本喜久治設計
	10 月	◎ [建築寫眞類聚-5] 建築寫眞類聚第9期第5輯40-41頁 喫茶店の新構成 卷一・喫茶店 紅屋・東京神樂坂・島藤設計部設計
		◎ [国際建築-36] 国際建築第10巻第10号圖版294 診療所をもつ住宅 子供部屋・鎌倉・山脇巖設計
	10 月	○ [国際建築-37] 国際建築第10巻第10号圖版298 一住宅 居間 讀書室より居間と食堂・フランス・andré luçat設計
		○ [国際建築-38] 国際建築第10巻第10号圖版303 チーリヒの住宅 居間・スイス・m.e.haefeli設計
	12 月	◎ [国際建築-39] 国際建築第10巻第12号圖版332 川崎守之助邸 二階寢室・東京麻布・レーモンド建築事務所設計
		◎ [国際建築-40] 国際建築第10巻第12号圖版334 ブラジル珈琲店ショールーム・銀座・レーモンド建築事務所設計

表1-3 雑誌に掲載されたカンチレバー式鋼管椅子-3

1935 (昭和10) 年 1 月	◎ [アサヒグラフ-8] アサヒグラフ第23巻第24号8-9頁 休息家具はかくあるべし・杉山豊桔 ◎ [アサヒグラフ-9] アサヒグラフ第24巻第2号8-9頁 T邸 露台 日光浴室・山田守設計 ◎ [国際建築-41] 国際建築第11巻第1号圖版4 M邸 居間 テレス・澁谷區代々木・谷口吉郎設計 ◎ [国際建築-42] 国際建築第11巻第1号圖版5 T字型の室内 居間・山脇巖設計 ◎ [国際建築-43] 国際建築第11巻第1号圖版8 内田邸 食堂・藏田周忠設計 ○ [国際建築-44] 国際建築第11巻第1号圖版16 書齋と温室窓装置の小食堂・オーストリア・ernst prischke設計 ○ [国際建築-45] 国際建築第11巻第1号圖版20 小住宅の居間兼書齋・ドイツ・dr. paul bry設計
〃 2 月	◎ [国際建築-46] 国際建築第11巻第2号圖版33-37 建築家土浦龜城氏の住宅 居間 食堂・品川區上大崎・土浦龜城設計
〃 4 月	○ [アサヒグラフ-10] アサヒグラフ第24巻第14号8-9頁 カーテンの機能・杉山豊桔
〃 6 月	○ [アサヒグラフ-11] アサヒグラフ第24巻第23号12頁 住宅衛生と換氣・吉田鐵郎 ◎ [国際建築-47] 国際建築第11巻第6号圖版164 武蔵平地の住宅 階段室ホール・藏田周忠及杉本英雄設計 ◎ [国際建築-48] 国際建築第11巻第6号圖版168 三島邸 居間 食堂・澁谷區千駄ヶ谷・土浦龜城設計
〃 7 月	◎ [国際建築-49] 国際建築第11巻第7号圖版180 高島邸 居間 食堂・品川區北品川・土浦龜城設計
〃 8 月	◎ [国際建築-50] 国際建築第11巻第8号圖版201-202 建築家山脇巖氏の住宅・目黒區駒場町・山脇巖設計
〃 9 月	○ [国際建築-51] 国際建築第11巻第9号圖版229 ドナウ河畔の別荘・オーストリー・Egon Fridinger設計
〃 12 月	○ [国際建築-52] 国際建築第11巻第12号圖版306 カンネール邸 居間・白耳義・L. H. Koninck設計 ○ [国際建築-53] 国際建築第11巻第12号圖版309 ゾンネヴェルト邸 居間・和蘭・Brinkman 及 Van der Vlugt設計
1936 (昭和11) 年 1 月	◎ [国際建築-54] 国際建築第12巻第1号圖版22 ブレイク邸 女の子の部屋・澁谷鉢山・アントニン・レーモンド設計
〃 2 月	◎ [国際建築-55] 国際建築第12巻第2号圖版37-40 鍵富正作邸・澁谷區松溝・村田正眞設計 ○ [国際建築-56] 国際建築第12巻第2号圖版42 組立住宅 W. M. Beard邸・カリフォルニア・R. J. ノイトラ設計・G. Ain協同
〃 3 月	○ [国際建築-57] 国際建築第12巻第3号圖版70 カリフォルニアの鋼鉄組立の學校 寄宿舎・R. J. ノイトラ設計 ○ [国際建築-58] 国際建築第12巻第3号圖版94 Gates houseの朝食室・Hampstead: Fohn Burnet Tait及Lorne設計
〃 4 月	○ [国際建築-59] 国際建築第12巻第4号圖版120 ブリュンの住宅・チェコ・Mies van der Rohe設計
〃 6 月	◎ [国際建築-60] 国際建築第12巻第6号圖版151 金子邸・東京等々力・藏田周忠設計 ◎ [国際建築-61] 国際建築第12巻第6号圖版154-156 建築家谷口氏の住宅 南側外觀・テレス 二階書齋 廣間・東京洗足・谷口吉郎設計
〃 7 月	◎ [アサヒグラフ-12] アサヒグラフ第27巻第4号36頁 ブラジル珈琲店ショールーム レーモンド設計 ◎ [国際建築-62] 国際建築第12巻第7号圖版186 齋藤邸 畫室東北隅・東京等々力・藏田周忠設計
〃 10 月	◎ [アサヒグラフ-13] アサヒグラフ第27巻第16号18-19頁 野々宮アパートメント 1階パーラー・土浦龜城設計

表1-4 雑誌に掲載されたカンチレバー式鋼管椅子-4

1937 (昭和12) 年 2 月	〃	11月	◎ [国際建築-63] 国際建築第12巻第11号圖版293-298 安川邸 食堂 表玄関ホール 裏階段室ホール 子息室・戸畑市・藏田周忠設計
			◎ [国際建築-64] 国際建築第12巻第11号圖版307-312 野々宮アパートメント 一室アパート ホール パーラー 寫真館のホール 第一寫場 第二寫場・東京九段・土浦龜城設計
	〃	12月	◎ [国際建築-65] 国際建築第12巻第12号圖版336-337 ギャラリー日本サロン・東京銀座・構造社設計施工
			◎ [国際建築-66] 国際建築第13巻第2号圖版84-85 湘南のH邸 日光室 二階子供室・山脇巖設計
	〃	4月	◎ [国際建築-67] 国際建築第13巻第2号圖版88-89 小住宅・村田邸 應接室 居間・堀山喜久夫設計
			◎ [国際建築-68] 国際建築第13巻第4号圖版124-125 K氏住宅 食堂 テレス 居間・東京中野・谷口吉郎設計
	〃	5月	◎ [国際建築-69] 国際建築第13巻第5号圖版158-161 慶應義塾幼稚舎 衛生室 教員室 面會所・東京天現寺・慶應義塾囑托・谷口吉郎・會禰中條建築事務所設計
			◎ [国際建築-70] 国際建築第13巻第5号圖版166 角谷邸 居間・東京澁谷・土浦龜城設計
	〃	6月	◎ [国際建築-71] 国際建築第13巻第6号圖版198 S邸 食堂・東京澁谷・山脇巖建築事務所設計
		8月	◎ [国際建築-72] 国際建築第13巻第8号圖版255 濱口別邸 書齋・東京上大崎・明石信道設計
1938 (昭和13) 年 7 月	〃	11月	◎ [国際建築-73] 国際建築第13巻第11号圖版336 最小限實驗住宅 客間・東京下落合・鷺塚誠一設計
		12月	◎ [建築寫眞類聚-6] 建築寫眞類聚第10期第3輯28頁 劇場と映畫館 有樂座二階喫茶室・阿部美樹志設計
	〃	8月	◎ [国際建築-74] 国際建築第14巻第7号圖版226-229 遠藤邸 應接間 食堂 子供室・東京世田ヶ谷・土浦龜城建築事務所設計
			◎ [国際建築-75] 国際建築第14巻第8号圖版240-246 B氏の住宅 テレス 日光室・東京郊外・與志田鐵郎設計
	〃	10月	◎ [国際建築-76] 国際建築第14巻第10号圖版313 山川邸・西宮市・堀口捨巳設計
			◎ [国際建築-77] 国際建築第14巻第10号圖版327 N邸 サンルーム 令息室・東京中野・山脇巖設計
	〃	11月	◎ [国際建築-78] 国際建築第14巻第11号圖版362-367 強羅ホテル ロビー 酒場・箱根・土浦龜城建築事務所設計
			◎ [国際建築-79] 国際建築第14巻第11号圖版377 日魯漁業社員クラブ 中四階の遊歩場・函館・圖師嘉彦建築事務所設計
	〃	1939 (昭和14) 年 1 月	◎ [国際建築-80] 国際建築第15巻第1号圖版11-14 慶應義塾寄宿舎 脱衣場 テレス・日吉台・谷口吉郎設計
			○ [国際建築-81] 国際建築第15巻第1号圖版30 イギリスの建築家のアパート住居・Wells Coates設計
1940 (昭和15) 年 1 月	〃	3月	◎ [建築寫眞類聚-7] 建築寫眞類聚第10期第13輯46-47頁 数寄屋趣味 割烹店 酒場新装集卷一・牛島割烹 かど世界 東京上野
		4月	○ [国際建築-82] 国際建築第15巻第4号圖版26 ハリー コブリック邸・ロサンジェルス・R.J. ノイトラ設計
	〃	6月	◎ [国際建築-83] 国際建築第15巻第6号圖版168-173 建築家の住宅・石本邸・東京五反田・石本喜久治設計
		8月	◎ [建築寫眞類聚-8] 建築寫眞類聚第10期第16輯18頁 理髪店と美容院・米倉理髪店 待合室・東京銀座・吉田五十八設計
	〃		◎ [建築寫眞類聚-8] 建築寫眞類聚第10期第16輯22頁 理髪店と美容院・マヤ美容院・東京新宿・川喜田煉七郎設計
			◎ [国際建築-84] 国際建築第16巻第1号圖版12-16 K邸 居間兼客間 食堂・三鷹・山脇巖設計

※○は外国のカンチレバー式鋼管椅子の紹介、◎は日本のカンチレバー式鋼管椅子の紹介。

表1-1~4に示した内容を年度別にまとめると、次のような数になる。

- 1931（昭和6）年—6（『国際建築』—5・『建築写真類聚』—1）
- 1932（昭和7）年—12（『国際建築』—9・『アサヒグラフ』—3）
- 1933（昭和8）年—12（『国際建築』—12）
- 1934（昭和9）年—23（『国際建築』—14・『アサヒグラフ』—5・『建築写真類聚』—4）
- 1935（昭和10）年—16（『国際建築』—13・『アサヒグラフ』—3）
- 1936（昭和11）年—14（『国際建築』—12・『アサヒグラフ』—2）
- 1937（昭和12）年—9（『国際建築』—8・『建築写真類聚』—1）
- 1938（昭和13）年—6（『国際建築』—6）
- 1939（昭和14）年—7（『国際建築』—4・『建築写真類聚』—3）
- 1940（昭和15）年—1（『国際建築』—1）

上記の内容から、1933（昭和8）年から1936（昭和11）年あたりにかけて、カンチレバー式鋼管椅子が雑誌に広く取り上げられたことが理解できる。

掲載された雑誌については、『国際建築』が84と最も多く、『アサヒグラフ』が13、『建築写真類聚』が9と続く。『国際建築』の編集者、執筆者と『アサヒグラフ』の執筆者は、重複している場合もあり、表1に示した『アサヒグラフ—2』の石本喜久治が設計した上田道次邸のような重複しない事例を除けば、おおむね『国際建築』の刊行日が竣工年月日に近い。

この竣工時期と『国際建築』の掲載時期に関しては、建築物の規模や公共的な役割によって多少異なるが、竣工してから2ヶ月以内に掲載されていることが多い。百貨店の白木屋は、1931（昭和6）年9月19日竣工し、『国際建築』の11月號に掲載されている。土浦龜城が設計した自邸も、1932（昭和7）年1月に竣工し、3月號に掲載されている。こうした掲載の早さは、編集委員と親しい建築家の作品を最優先にしているからであり、東京に在住する建築家の仲間内で自画自賛している雑誌と評されても仕方がない。

『アサヒグラフ』も、東京中心の編集が目立つ雑誌である。そのことが地方在住者へのアピールであり、魅力であったに違いないが、カンチレバー式鋼管椅子は、イ

ンテリアの記事に多く見られる。合理的でモダンな生活の紹介は、山田守、吉田鐵郎といった逋信省の建築設計家、土浦龜城や山脇巖のような夫妻で海外生活をした経験のある建築家が深く関わっている。土浦龜城夫人は、アメリカの近代的な生活観を身につけた女性の代表として、自邸内での生活も写真で紹介されている。欧米に見られる女性の家事労働に配慮した住宅設計観を積極的に紹介することが、日本人の近代化に繋がると思われている編集者は、モダニズムを主張する建築家の作品を度々取り上げる。『アサヒグラフ』の生活に関する記事は、欧米文化をひたすら追従する。

1932（昭和7）年4月20日に発行された『アサヒグラフ』には、[スウパー・モダーンの家]と題して土浦龜城の自邸を紹介している。「古い傳統の衣をあつさり」と脱ぎ捨て、「住宅は住むための機械である」という新しい建築家の理想を鮮やかに示す住宅が出来上がった。建築家土浦龜城氏が夫人と協力の下に府下大崎に建設された氏自身の住宅がそれだ」と編集者は絶賛する。住宅の内容を解説する前に、端から高い評価を下している。

『建築写真類聚』は、洪洋社が1915（大正4）年より出版しているもので、対象とする建築は実に多岐にわたっている。その実態については藤森照信等が『写真集幻景の東京』[注2]で詳しく解説している。特徴的なのは、美容院・理髪店・カフェー・喫茶店・飲食店・酒場といった風俗的な要素の強い建築も対象としている点である。銀座の大規模喫茶店は『国際建築』で紹介されても、小さな美容院や酒場は紹介されることは稀である。大衆文化の研究対象に建築を取り上げた『建築写真類聚』には、庶民生活の近代化を検討する上で参考にするべき点が多々ある。

3.2. 執筆者および建築家

三つの雑誌で紹介された建築家は次のような人物である[注3]。（）内の数字は掲載回数、また掲載年の早い順に並べた。●印は、1931（昭和6）年10月21日に行われた「Y S Y鋼管家具—第4回研究座談会」出席者。

○山脇巖 [1898-1987]（7）東京美術学校卒

●藏田周忠 [1895-1965]（6）早稲田大学選科

●山田守 [1894-1966]（3）東京帝國大学卒

●石本喜久治 [1894-1963]（6）東京帝國大学卒

○伊藤（1）※『国際建築』に名の記述無し。

●土浦龜城 [1887-1996]（16）東京帝國大学卒

○市浦健 [1904-1981]（1）東京帝國大学卒

- 豊口克平 [1905-1991] (1) 東京高等工芸卒
- 佐藤武夫 [1899-1972] (2) 早稲田大学卒
- レーモンド [1888-1976] (7) プラーク工科大学
- 遠藤新 [1889-1951] (1) 東京帝國大学卒
- 山越邦彦 [1900-1980] (2) 東京帝國大学卒
- 谷口吉郎 [1904-1979] (5) 東京帝國大学卒
- 今井猛雄 [1904-1994] (1) 早稲田大学卒
- 齋藤寅郎 [1902-1971] (1) 早稲田大学卒
- 山口文象 (山口蚊象) [1902-1987] (1) 東京高等工業附属職工徒弟学校卒
- 島藤設計部 (2) (島田藤 東京帝国大学卒)
- 杉山豊桔 (2)
- 吉田鐵郎 (與志田鐵郎) [1894-1956] (2) 東京帝國大学
- 杉本勇雄 (1)
- 村田正眞 (1) [? -1987] 東京美術学校
- 構造社 (1)
- 堀山喜久夫 (1)
- 會禰中條建築事務所 (1)
- 明石信道 [1901-1986] (1) 早稲田大学卒
- 鷲塚誠一 (1)
- 阿部美樹志設計 [1883-1965] (1) 札幌農学校卒
- 堀口捨巳 [1895-1984] (1) 東京帝國大学
- 圖師嘉彦 [1904-1980] (1) 早稲田大学卒
- 吉田五十八 [1894-1974] (1) 東京美術学校卒
- 川喜田煉七郎 [1902-1975] (1) 東京高等工業付設工業教員養成所卒

上記の執筆者の中で建築家の9名が、1931(昭和6)年10月21日に行われた「Y S Y 鋼管家具—第4回研究座談会」に出席している[注4]。司会役の吉田亨二は、建築材料研究の第一人者であり、日本建築学会内での信頼も厚く、1939(昭和14)年には副会長に就任している。

「Y S Y 鋼管家具—第4回研究座談会」が開催された当時は早稲田大学の教授であった。また出席者は『國際建築』の同人か、面識のある間柄であり、東京帝國大学、早稲田大学、東京美術学校、東京高等工業、東京高等工芸の出身者が大半を占めている。9名の建築家は、ヨーロッパにおいて著名な建築家がカンチレバー式鋼管椅子を広く採用していることを知っており、その価値観をおおむね追従している。この9名の中で、土浦龜城の設計した住宅とカンチレバー式鋼管椅子を紹介した記事の多さは突出している。次に山脇巖、レーモンド、さらに藏田周忠、石本喜久治、谷口吉郎に関する記事が目立つ。

カンチレバー式鋼管椅子を採用した建築家は、30代～40代という年齢層に集中している。市浦健、谷口吉郎、今井猛雄、圖師嘉彦等は1904(明治37)年生まれで、30代前半の若い建築家であった。市浦健が自邸に使用したのは1932(昭和7)年であるから、28才の時である。

使用した建築家を見る限り、Y S Y 鋼管家具というメーカーの存在も含め、仲間を介してカンチレバー式鋼管椅子を広めていったということになるだろう。

3.3. 使用地域および場所

カンチレバー式鋼管椅子は、藏田周忠設計の福岡県戸畑の安川邸[注5]、圖師嘉彦設計の北海道函館の日魯漁業社員クラブ[注6]、堀口捨巳の設計した兵庫県西宮の山川邸[注7]といった建築物を除けば、殆どが東京かその近郊で使用されている。関西に普及しない一つの理由として、関西在住の建築家が、カンチレバー式鋼管椅子を積極的に用いなかったことが挙げられる。間違いなく椅子の情報は伝わっているのに、何故か興味を示さなかったのである。換言すれば、当時の建築家は、関東と関西では鋼管家具に対する価値観に大きな相違があったということになるだろう。

使用される場合は、個人住宅と公共性を伴った空間の両面から見ていく必要がある。山田守が設計し、1931(昭和6)年に竣工した図1[注8]の出雲橋トムサム・ゴルフコース二階休憩室には、7脚の椅子が置かれている。また石本喜久治が設計し、同年9月に竣工した白木屋七階パーラーは、約20脚の椅子が置かれており[注9]、カンチレバー式鋼管椅子が早い時期から公共性を伴った空間に使用されていることがうかがわれる。

図1のミースが設計した椅子については、輸入品であ

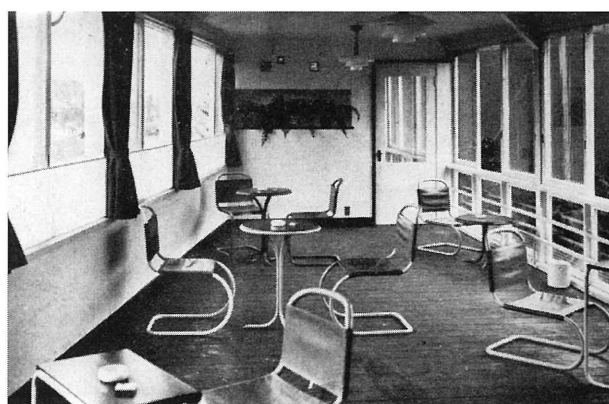


図1 出雲橋トムサム・ゴルフコース二階休憩室

るのか、または国産であるかについては判断が難しい。山田守が日本金属加工株式会社の製品カタログを見ていたならば、国産の模造品を購入した可能性が高い。白木屋の椅子に関しては、石本喜久治か水谷武彦が設計したものと推定する。その論拠に関しては次章にて述べる。

1932（昭和7）年3月に発行された『国際建築』では、カンチレバー式鋼管椅子の特集がなされ、土浦龜城が設計した自邸と平林邸、市浦健が設計した自邸に置かれた椅子を紹介している。この時期から、個人住宅におけるカンチレバー式鋼管椅子の普及が本格的に始まったとすべきである。

喫茶店、ダンスホールといった大衆の場にカンチレバー式鋼管椅子が普及するのは、図2に示した佐藤武夫が設計し、1932（昭和7）年に竣工したダンスホール フロリダ〔注10〕あたりから、図3〔注11〕に示した石本喜久治が設計し、1933（昭和8）年に竣工した喫茶店銀座コンパル〔注12〕にかけての時期であろう。大衆の集う場においても、カンチレバー式鋼管椅子の普及は予想以上に早い。1934（昭和9）年には、レーモンドが設計したブラジル珈琲店ショールームが銀座で竣工し〔注13〕、銀座の新しい喫茶店では鋼管椅子を積極的に採用

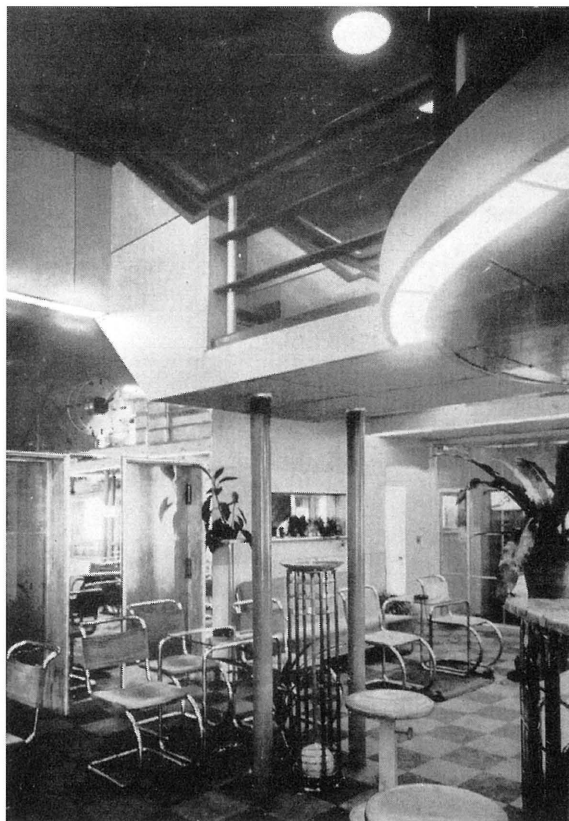


図2 ダンスホール フロリダ



図3 喫茶店コンパル

する。

図3の喫茶店コンパルを見る限り、カンチレバー式鋼管椅子の量産化は着実に進んでいる。

3.4. 輸入された椅子の値段

1932（昭和7）年5月に発行された『アサヒグラフ』には、「新興ドイツ建築工藝」と称して、上野松坂屋の輸入椅子を紹介している〔注14〕。カンチレバーの製品は3点あり、次のような値段である。

①鋼管製卓子（一三四圓）

②同小椅子（七六圓五〇銭）ミースのMR10

③同長椅子（二五七圓）ミースのデザイン

②の小椅子は、図1と同じミースのMR10である。当時の76円は、現在の20万円以上に相当する。ミースのデザインした長椅子の257円に至っては、庶民には全く手の届かない高嶺の花であった。こうした高額の鋼管椅子を購入できる人は、極めて少数であり、建築家にとっても簡単に手の出せる代物ではなかったはずである。

日本金属加工株式会社のカatalogでは、②のイミテーションが10円、楽掛椅子の高いものでも70円程度である〔注15〕。当時の若い建築家が「Y S Y鋼管家具―第4回研究座談会」に多数出席した理由には、輸入品と国産品の値段の差に興味があったことも事実である。

4. カンチレバー式鋼管椅子における意匠の展開

4.1. 既存の意匠を用いた建築家

インテリアの設計において、椅子の設計までこだわる建築家と、それほどこだわらない建築家がいる。どの程度こだわるかは、建築家の家具に対する価値観の相違であろう。仮に他人の設計した椅子であったとしても、造形に対する共通認識があれば、特に問題はないと考えている建築家も多く、昭和初期においても既存の製品をコーディネートして対応している。

表1-1～4に示したカンチレバーの椅子で、明らかにヨーロッパ輸入品かそのイミテーションを使用しているのは、下記のものである〔注16〕。

○1931（昭和6）年

〔国際建築―3〕山田守設計―ミースMR10

○1932（昭和7）年

〔国際建築―6〕伊藤氏設計―ブロイヤーB33, B55

〔国際建築―7〕土浦龜城設計―ブロイヤーB33

〔国際建築―8〕土浦龜城設計―ブロイヤーB33

〔国際建築―9〕市浦健設計―ブロイヤーB33

〔アサヒグラフ―1〕土浦龜城設計―ブロイヤーB33

〔国際建築―13〕佐藤武夫設計―ミースMR10

〔国際建築―14〕レーモンド設計―ブロイヤーB33

○1933（昭和8）年

〔国際建築―18〕遠藤新設計―ブロイヤー楽掛椅子

〔国際建築―19〕山越邦彦設計―ブロイヤーB35

○1934（昭和9）年

〔アサヒグラフ―5〕山越邦彦設計―ブロイヤーB35

〔アサヒグラフ―6〕土浦龜城設計―ブロイヤーB33

〔建築寫眞類聚―2〕土浦龜城設計―ブロイヤーB33

〔建築寫眞類聚―3〕今井猛雄設計―ミースMR10

〔国際建築―27〕齋藤寅郎設計―ブロイヤーB32

〔アサヒグラフ―7〕土浦龜城設計―ミースMR10

〔国際建築―32〕山口蚊象設計―ミースMR10

〔国際建築―33〕土浦龜城設計―ミースMR10

〔建築寫眞類聚―5〕島藤設計部設計―ブロイヤーB32

〔国際建築―37〕山脇巖設計―ミースMR10

○1935（昭和10）年

〔アサヒグラフ―9〕山田守設計―ブロイヤーB33, B55

〔国際建築―41〕谷口吉郎設計―ブロイヤーB33, ミースMR10

〔国際建築―47〕藏田周忠及杉本勇雄設計―ブロイヤーB33

〔国際建築―48〕土浦龜城設計―ブロイヤーB33

〔国際建築―50〕山脇巖設計―ミースMR10, ブロイヤーbt24

○1936（昭和11）年

〔国際建築―54〕レーモンド設計―ブロイヤーB33

〔国際建築―60〕藏田周忠設計―ブロイヤーB33

〔国際建築―61〕谷口吉郎設計―ミースMR10

〔国際建築―62〕藏田周忠設計―ブロイヤーB33

〔国際建築―65〕構造社設計―ブロイヤーB33

○1937（昭和12）年

〔国際建築―66〕山脇巖設計―ブロイヤーB32

〔国際建築―68〕谷口吉郎設計―ミースMR10（籐張り）

〔国際建築―71〕山脇巖―ブロイヤーB32

〔国際建築―72〕明石信道設計―ブロイヤー楽掛椅子

〔国際建築―73〕鷺塚誠一設計―ブロイヤーB33

○1938（昭和13）年

〔国際建築―76〕堀口捨巳設計―ミースMR10

〔国際建築―77〕山脇巖設計―ブロイヤーB55

○1939（昭和14）年

〔国際建築―80〕谷口吉郎設計―ブロイヤーB33

〔建築寫眞類聚―8〕吉田五十八設計―ブロイヤーB33

○1940（昭和15）年

〔国際建築－84〕山脇巖設計－ブロイヤーB33

上記の内容から見る限り、ブロイヤーのB33、ミース

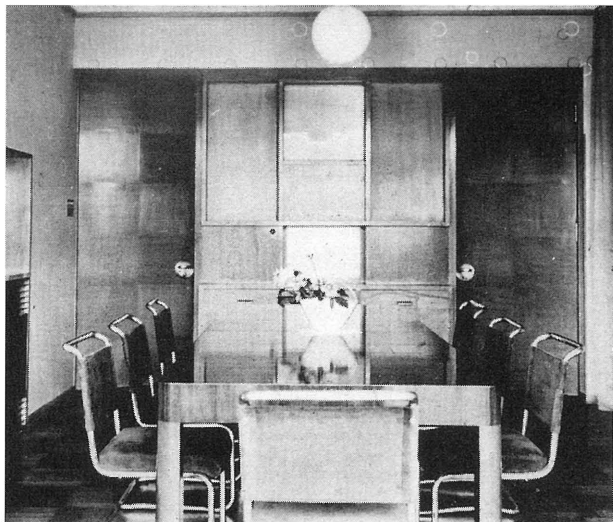


図4 安川邸食堂

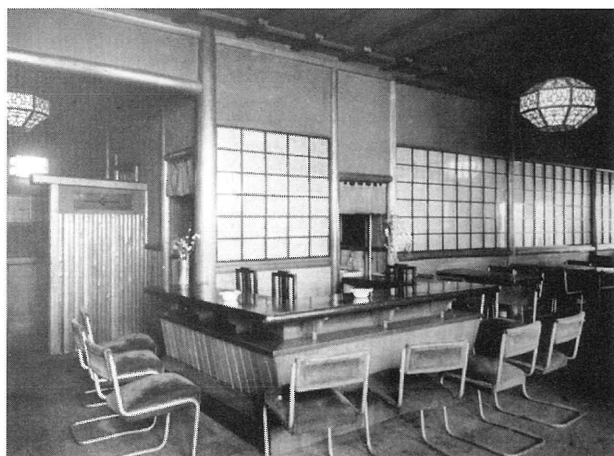


図5 牛島割烹かど世界内部

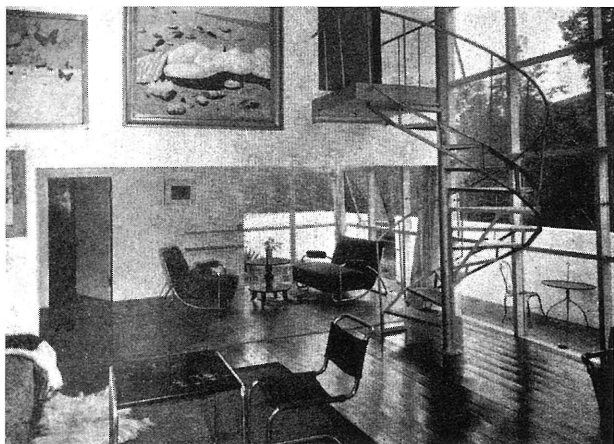


図6 三岸好太郎邸アトリエ兼応接間

のMR10が多数を占める。またブロイヤーのB33の金属フレームに、座面だけ別のものを取り付けた図4〔注17〕のような改造タイプも多数見られ、ブロイヤーのB33は、日本における最もポピュラーなカンチレバー式鋼管椅子となった。

図4の改造目的は、オリジナルの座面が厚手の布を使用しているため、長時間座ると疲れることから、緩衝性のあるマットを座面に付加することにある。少し極端な言い方かもしれないが、デザインのおもしろさと座り心地とは特に相関はなく、ワシリーチェアのようなキャンバス地を使用した座面は疲れやすい。また、戦後から盛んに製作された成形合板の椅子は、筆者の体験では30分座ると疲れてしまう。昭和30年代の小学校で使用したブナ材の椅子は、家庭から座布団を持って行って対応していた。リートフェルトのレッド&ブルーチェアの合板の座面に、長時間座して心地よいという人はまずいない。

図5〔注18〕は大衆的な割烹で使用されるブロイヤーB33の改造版である。座面にクッションを補強し、長時間の座姿勢に対応できるように工夫しているが、設計者の名前は遺されていない。まさにカンチレバー式鋼管椅子におけるアノニマスデザインである。これも一つの家具設計観であり、大衆への普及に貢献している。

輸入品またはイミテーションを使用している代表的な建築家が、山脇巖である。前報で紹介したように、山脇はヨーロッパの鋼管家具の意匠、構造を分析し、鋼管家具の特徴である曲面や弾性を過度に強調したデザインを批判している〔注19〕。またドイツから帰国する際に、ブロイヤーやミースの椅子をいくつか持ち帰っており〔注20〕、いわゆる本物志向を強く持った人物である。

山脇の設計した建築に配したカンチレバーの椅子をいくつか紹介する。図6〔注21〕は1935（昭和10）年に竣工した三岸光太郎邸アトリエ兼応接室である。2種類のブロイヤーデザインの椅子を室内に配している。大きな採光部とフローリングの床、螺旋階段、そしてカンチレバーの椅子は、山脇が学んだ1930（昭和5）年頃のドイツの住宅建築を彷彿させる。使用されている椅子が輸入品であるか、国産であるかは判別し難い。

ブロイヤーの楽掛椅子に関しては、図7〔注22〕に示したように、日本金属加工株式会社のカatalogにも掲載されており、高い精度でコピーされている。また図8〔注23〕に示したように、他社でも類似したコピー製品を製作している。山脇は戦局が厳しくなる1940（昭和

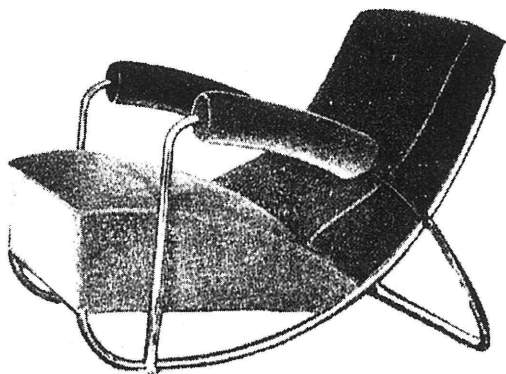


図7 ブロイヤーの椅子のコピー



図8 コピーした鋼管家具の広告

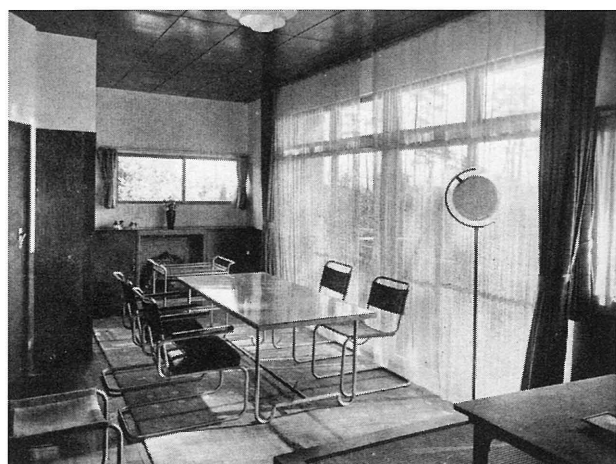


図9 K邸食堂



図10 金子邸



図11 齋藤邸画室

15) 年にも住宅設計を行い、図9〔注24〕に示したようなブロイヤーのB33モデルを使用している。この椅子は海外から輸入できる時期でないことから、まちがいなくコピー製品である。山脇の使うカンチレバー式鋼管椅子には、最後まで独自の構造や意匠が施されることはなかった。こうした室内設計観を、どの程度独自なものとして取り扱うかについては今後さらに検討する必要がある。

山脇巖とドイツで鋼管家具を見て回り、『国際建築』



図12 白木屋七階パーラー

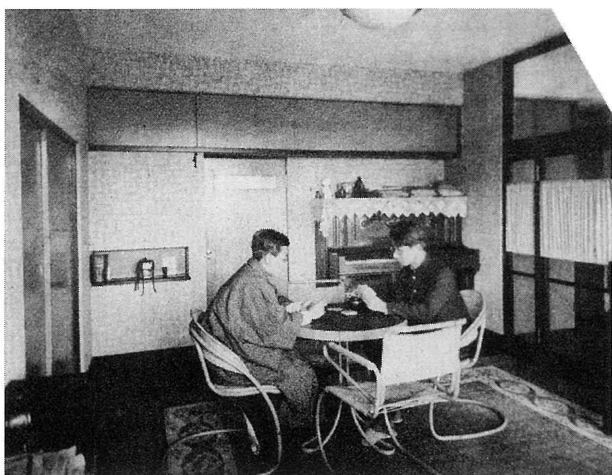


図13 上田邸

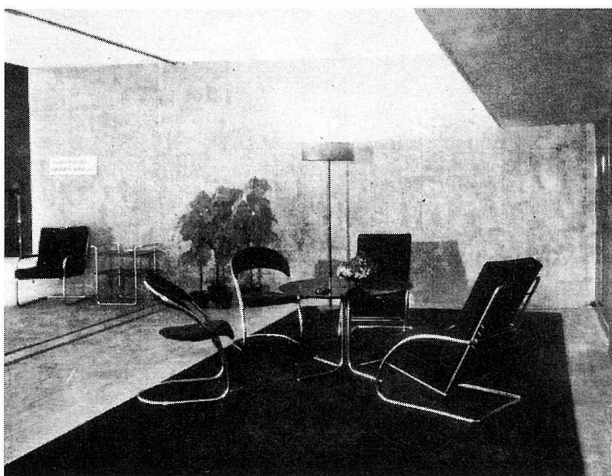


図14 ルックハルト兄弟の設計した椅子

に度々記事を書いた人物が蔵田周忠である。先に福岡県の安川邸配置された椅子を紹介したが、蔵田も基本的には既存の椅子を室内に配しているように見える。型而工房における椅子の研究をプロジェクトで行うなど、とにかく蔵田は椅子の研究には熱心であった。

蔵田の設計した建築に配した図10〔注25〕、図11〔注26〕の椅子は、共にプロイヤーのB33をコピーしたものであり、座面や背もたれの布を取り替えただけで、フレームは同じである。いずれも、同一モデルのバリエーションを変え、異なる建築に対応させるという手法である。そのこと自体は建築家の自由であろうが、型而工房時代に取り組んだカンチレバー鋼管椅子の研究成果が、図10、11の採用であったとは思えない。山脇巖とは異なり、蔵田の椅子研究にはどうも一貫性が感じられない。

4.2. 石本喜久治の意匠

石本喜久治は、先にも示したように、1931（昭和6）年9月に竣工した白木屋7階パーラーにカンチレバーの椅子を使用し、1932（昭和7）の上田邸、1933（昭和8）年の喫茶店コンパルというように、個人と高い公共性の両面から椅子を検討している。図12〔注27〕が白木屋のパーラー、図13〔注28〕が上田邸の内部である。

石本の使用した図12、13の椅子は、外国製品の単なるコピーではない。図12、13で参考にしてしているのは、図14〔注29〕に示したルックハルト兄弟が設計した左手に見えるタイプである。石本は、図13左の椅子のように、座面と背もたれを固定することによって新たなフォルムを展開する。一種のリデザインというべきものであろうが、山脇や蔵田の鋼管椅子に対する考えとは一線を画す。

図13の手前に見える椅子は、前報でも紹介した水谷武彦が設計した図15〔注30〕の椅子である。この椅子を何故石本が使用したのかが問題である。

実は水谷の設計した図15の椅子は、図16〔注31〕に示した市浦建設の自邸、図17〔注32〕に示した石本喜久治の自邸にも使用されている。こうした椅子の使用方法は、意匠の好みというより建築家同士の親交の強さが深く関わっていると思われる。水谷武彦の1931（昭和6）年以降の活動については実態がよくわからない。カンチレバーの椅子に関しても、新作を発表したという記事は見当たらない。しかしながら、何人かの建築家と交流し、自身の設計した椅子が評価されていたことも事実である。カンチレバーの椅子の使用にも、一種の人脈が関与している。

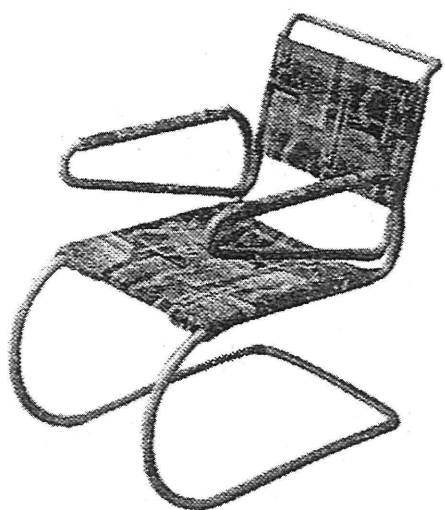


図15 水谷武彦の設計した椅子

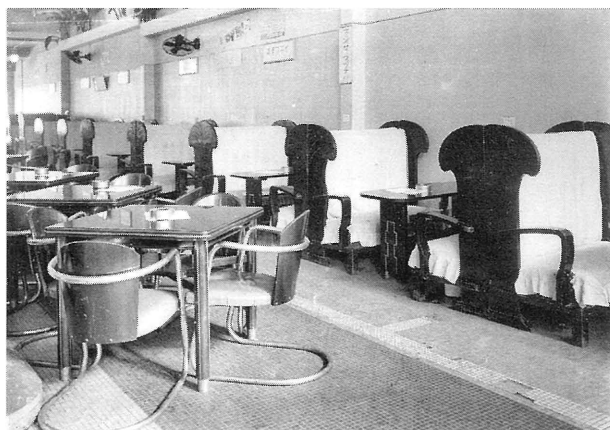


図18 喫茶店コンパルの椅子



図16 市浦建自邸居間



図19土浦龜城自邸居間

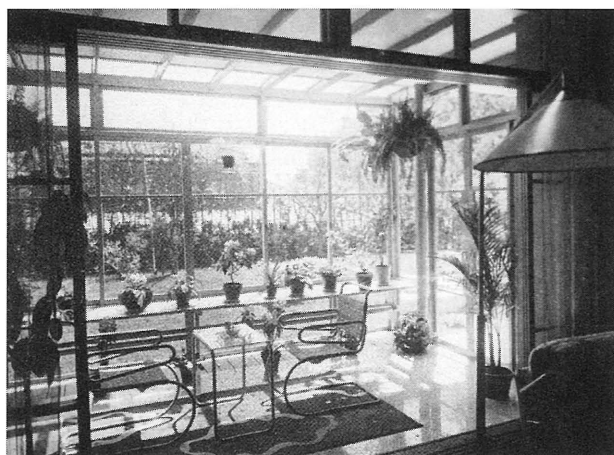


図17 石本喜久治自邸

石本は図18〔注33〕のような新たな意匠を施した椅子を喫茶店コンパルで使用する。図12, 13の椅子より洗練されており、一つの進化を感じる。先の山脇巖や藏田とは対照的であり、積極的なデザインの展開という点では好感が持てる。

4.3. 土浦龜城の意匠

土浦龜城設計の建築内で使用するカンチレバー式鋼管椅子は、既製品を使用する場合と、自身で設計した製品を使用する場合がある。

確かに土浦はコピー製品も多用しているが、1932（昭和7）年に竣工した自邸の椅子には、自身で設計した椅子が置かれている。図19〔注34〕がその椅子である。どこか野暮ったいような意匠ではあるが、当初からコピー

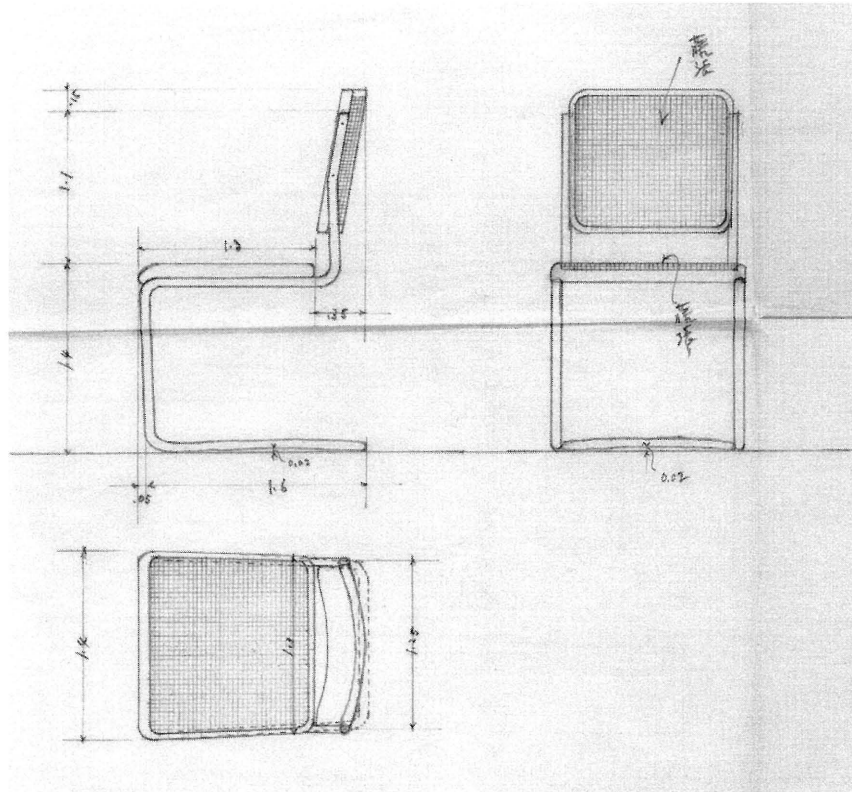


図20 土浦龜城設計の竹内邸椅子

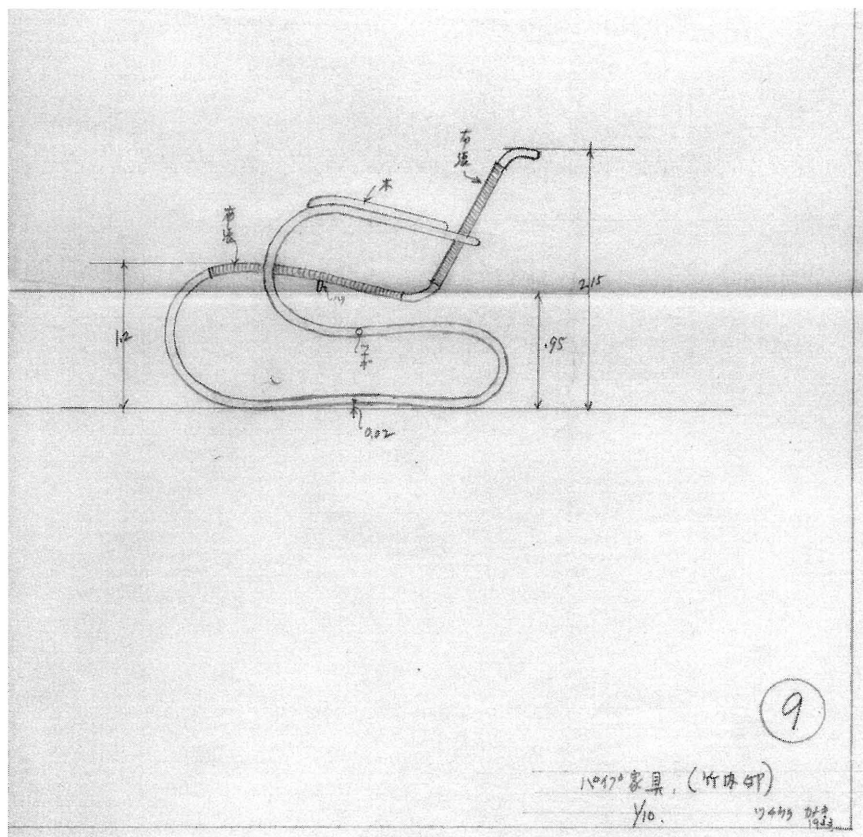


図21 土浦龜城設計の竹内邸椅子



図22 竹内邸食堂



図23 竹内邸居間

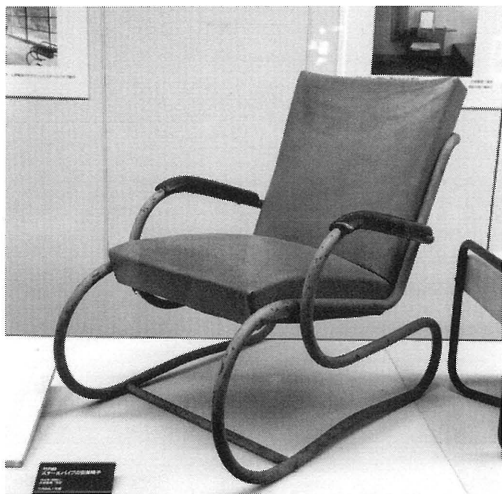


図24 土浦龜城の設計した椅子



図25 土浦龜城自邸居間

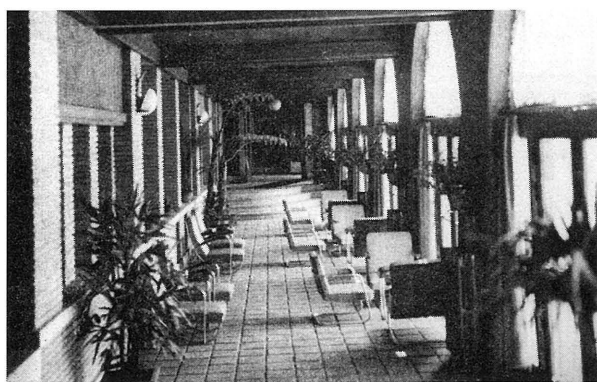


図26 満州中央銀行倶楽部ベランダ



図27 映画『我が青春に悔いなし』

製品と共に、少しでもオリジナリティーを取り込もうとする意欲が感じられる。

2006（平成18）年3月～5月にかけて、江戸東京博物館にて「昭和モダニズムとバウハウスー建築家土浦龜城を中心にー」という企画展が開催された。この展示の中で、土浦龜城のカンチレバー式鋼管椅子の設計図と、竣工当時の写真が公開された。いずれも1933（昭和8）年に竣工された竹内邸のもので、図20、21〔注35〕が設計図、図22、23〔注36〕が椅子を配した室内風景である。

図20、21は元々一枚の図面に描かれていたものを、筆者が見やすいように分割した。

土浦龜城の設計観は、図20、22に見られるようなプロイヤーのB32を殆ど模倣したリデザイン的なものと、図21、23のように、かなりオリジナリティーの高いものに大別される。オリジナリティーが高くとも、全体の意匠が必ずしも優れているとは限らない。図24〔注37〕は図21の現存する作品である。鋼管に強度があることは大切であるが、全体のイメージとしてはシャープさに欠ける。また座面を布製から改造しており、布を張った座面の座り心地に設計上の問題があったと推察される。

土浦龜城の設計した建築は予想以上に多く、カンチレバー式鋼管家具は、バリエーションを増やして対応している。土浦は1933（昭和8）年以降、座面に厚いクッションを置くことが多くなり、特に住宅の居間やホテルのロビーのような長時間くつろぐ場所に使用する。図25〔注38〕がその代表的な椅子である。同様の椅子は、図26〔注39〕に示したように、遠藤新も満州の新京で1935（昭和10）年に竣工した満州中央銀行クラブで使用しており〔注40〕、建築家同士の交流が感じられる。土浦と遠藤は共に東京帝国大学建築学科の出身で、フランク・

ロイド・ライトが帝國ホテルを設計したときのアシスタントである。

土浦龜城は1939（昭和14）年より渡満し、建築事務所を構える。この渡満の契機に、遠藤新との親交が関与したことは間違いない。土浦は日本のモダニズム建築を満州でも展開したが、カンチレバー式鋼管椅子に関する画像資料は、残念ながら紹介されていない〔注41〕。

5. まとめ

雑誌の掲載数から見る限り、カンチレバー式鋼管椅子は、1933（昭和8）年から1937（昭和12）年あたりに最も需要があった。また、公共空間、個人住宅、風俗的な場所にも急速に広がり、量産化もなされていたようである。但し、その普及は東京都とその近郊に限られ、関西には殆ど波及しない。

バウハウスを含めた1920～1930年代のドイツに留学、研修をした建築家を中心に、輸入されたカンチレバー式鋼管椅子やその模造品が使用された。また一部の椅子に独自の設計が加えられた。こうしたヨーロッパで流行するカンチレバー式鋼管椅の使用については、建築家同士の交流が深く関わっている。

全体としては意匠に斬新なものが少なく、ヨーロッパの製品を追従する意識が強い。特に知名度の高いプロイヤーやミースの作品に傾倒している。それでも座り心地の良さや、一種のバリエーションを求めてリデザインを繰り返している。このようなリデザインを施したカンチレバー式鋼管椅子が、戦前期の喫茶店や美容院といった大衆の場に登場したところに、日本人の意匠観を垣間見ることができる。

図27〔注42〕は、1946（昭和21）年の10月に封切られた『我が青春に悔いなし』の一場面である。1933（昭和8）年の滝川事件を題材にした作品で、京都と東京が舞台となっている。監督である黒澤明は、1941（昭和16）年の銀座の喫茶店を再現する際、プロイヤーのカンチレバー式鋼管椅子（B33、B55）を用いている。戦前の銀座でカンチレバー式鋼管椅子が定着していたことをうかがわせる貴重な資料である。

第二次大戦後には、建築雑誌でもカンチレバー式鋼管椅子は殆ど取り上げられていない。少なくとも1950年代までは、戦前のような流行現象は一切認められない。椅子の流行は、カンチレバー式鋼管椅子から、イームズに代表される成形合板の椅子に移行した。カンチレバー式鋼管椅子の代表的なデザイナーであるマルセル・プロイ

ヤーも、1936（昭和11）年にイソコンチェアを発表し、成形合板の椅子の設計に没頭するようになる。

カンチレバー式鋼管椅子は、現在全国各地で広く使用されている。どのような過程を経て復活して普及したかについては、第3報にて提示する予定である。

最後に、本論を作成するにあたり、江戸東京博物館の早川典子学芸員より、土浦龜城の資料についてご紹介をいただき、貴重な御教示を賜った。記して謝意を表したい。

注

- 1) WACHSENDE HAUSの表記については、『国際建築』の原文通りとした。
- 2) 藤森照信・初田亨・藤岡洋保編：写真集 幻景の東京 大正・昭和の街と住い、柏書房、1998
- 3) 建築関連の刊行物に記載されていない人名については、生没年、出身学校の記載はできなかった。今後の課題としたい。
- 4) 国際建築協会編：Y S Y鋼管家具―第4回研究座談會一、国際建築第8巻第3号、国際建築協会、PP.152-169、1932
- 5) 表1-3〔国際建築-63〕
- 6) 表1-4〔国際建築-79〕
- 7) 表1-4〔国際建築-76〕
- 8) 表1-1〔国際建築-1〕
- 9) 表1-1〔国際建築-4〕〔建築写真類聚-1〕
- 10) 表1-1〔国際建築-13〕
- 11) 表1-2〔国際建築-23〕
- 12) 表1-2〔建築写真類聚-4〕
- 13) 表1-2〔国際建築-50〕
- 14) 表1-1〔アサヒグラフ-3〕
- 15) 前掲2)：p.168
- 16) B33M、R10といった表記は、1930（昭和5）年前後のトーネット社のカタログ掲載ナンバーである。本論では他に区別すべき用語がないので使用した。
- 17) 表1-3〔国際建築-63〕
- 18) 表1-3〔建築写真類聚-7〕
- 19) 山脇巖：獨逸に於ける鐵管家具の傾向、国際建築第8巻第3号、国際建築家協会、pp.143-151、1932
- 20) 山脇道子：バウハウスと茶の湯、新潮社、P.130、1995
- 21) 山脇巖：樺、アトリエ社、図版、1942 62-69頁にアトリエを1938（昭和13）年に訪れたことが述べられている。
- 22) 前掲2)：p.165
- 23) 国際建築協会編：国際建築第9巻第9号、国際建築協会、広告、1933
- 24) 表1-4〔国際建築-84〕

- 25) 表 1－3 [國際建築－60]
- 26) 表 1－3 [國際建築－62]
- 27) 表 1－1 [國際建築－4]
- 28) 表 1－1 [アサヒグラフ－2]
- 29) 表 1－1 [國際建築－2]
- 30) 水谷武彦：鋼管製家具，帝國工藝1931年5月号，帝國工藝會，P.8，
1931年
- 31) 表 1－1 [國際建築－9]
- 32) 表 1－4 [國際建築－83]
- 33) 表 1－2 [建築寫眞類聚－4]
- 34) 表 1－2 [建築寫眞類聚－2]
- 35) 江戸東京博物館所蔵
- 36) 江戸東京博物館所蔵
- 37) 筆者撮影2006年
- 38) 表 1－2 [國際建築－46]
- 39) 遠藤都：建築家 遠藤新 作品集，遠藤新生誕百年記念事業委員会，
p.175，1991
- 40) 遠藤新が使用する椅子には肘掛け部分の形状が少し異なる。この違いは木製のパーツを付加していないためであろう。
- 41) 『國際建築』が1940（昭和15）年以降休刊になり，少なくとも戦争中には刊行物に紹介されていない。しかしながら，皆無がどうかは現状では判断できない。満州建築史研究の専門家より今後御教示をいただく予定にしている。
- 42) 東宝株式会社より掲載許可済み。黒澤明監督，原節子と藤田進主演のこの映画は，おそらく1946（昭和21）年の春から初秋に撮影されたと思われる。当時カンチレバー式鋼管椅子が生産されていた可能性はなく，戦前の製品を撮影に使用したと推察される。